

Mansfield Park における屋敷

井上麻美

1

Jane Austen (1775–1817) が生きた時代は、慣習、思想、価値観、職業といった様々な事柄において、古いものから新しいものへと変化が生じた時であった。例えば、文学では、理性を重んじる古典主義的思想から感性を重んじるロマン主義的思想へと変化が見られ、感傷小説やゴシック小説などが流行した。さらに、精神疾患で一線を退いた国王 George 3 世の代わりに国政に携わった当時の皇太子（後の George 4 世）のもとで賭博、飲酒、競馬といったあらゆる娯楽やパーティーに明け暮れる華やかな文化、いわゆるリージェンシーが花開いた。さらに地主階級の人々の間で、古く伝統のある屋敷を現代風に改良したり、庭園を「ピクチャレスク」風に作り変えることが急速に流行するなど、この当時の建築と風景に関する活動には勢いがあった。

Jane Austen の作品においても、建築や庭園への言及は多く見られる。本論で取り上げる *Mansfield Park* (1814) においても庭園や屋敷の改良が話題にされている。作者が物語を展開させている主な舞台は、ロンドンではなく地方の紳士階級と彼らを取り巻く狭い環境である。*Mansfield Park* は、物語の中心となる場所がそのまま題名となっている。つまりそれだけこの場所が重要であることが予測される。この作品には、*Mansfield Park* の他に *Sotherton Court* という古くから受け継がれている屋敷が登場する。しかし、両者の間にはその基盤に社会的・財政的違いが見られる。そして、そこから当時の財産や階級に対する価値観の変容も窺い知ることができる。本論では *Bertram* 家と *Rushworth* 家が所有する屋敷と、それを支える経済的基盤を明らかにしていく。

2 Sotherton Court

まず当時の地主階級について触れておきたい。地主

階級の人々は、広大な領地から地代を得て、力をつけることによって何代にもわたって一族の社会的・経済的基盤を築いてきた。彼らを階級で分けると、まず大地主である貴族、その次に土地を持つ准男爵、その下にジェントリーがいた。そんな彼らが住む家がカントリー・ハウスと呼ばれるものである。18世紀から19世紀初頭のイギリスは、杉恵惇宏曰くまさに「カントリー・ハウスの黄金時代」(26)であった。カントリー・ハウスは、当時の貴族や紳士階級が持つのが一般的であった。そしてその館は代々受け継がれていった。カントリー・ハウスの役割は単に住居としてだけのものではない。建築・装飾・調度品の豪華さや庭園の設計に至るまで全てに、当主の教養と財力が問われるのである。彼らにとって、土地と館はまさに社会的地位を示すものであった。

Mansfield の当主、*Sir Thomas Bertram* の長女 *Maria* と婚約した *Mr. James Rushworth* は、広大な屋敷 *Sotherton Court* の当主である。*Mr. Rushworth* の人となりは、*Maria* の兄 *Edmund* が「12000ポンドの収入がなければ、ただの馬鹿ではないか」(*MP* 30)と言いつつ、後に *Sir Thomas* が *Mr. Rushworth* に対して、無教養なのに自分でそのことに気付いていないという印象を持つほどの「愚鈍な青年」(29)であったが、彼は先祖代々受け継がれてきた広大な領地と屋敷などを所有し、将来を保証されたと言ってよい身分であった。まず、その屋敷の様子が第1巻第4章に語られている。*Mr. Rushworth* が初めて *Bertram* 家を訪れた時に、彼の友人の屋敷が当時は有名だった改良家 *Mr. Repton* の手により見事に生まれ変わったのを見て、いたく感動したことを皆に聞かせ、友人の屋敷と比べて自分の屋敷が「古いだけの牢獄」(39)に見えたと言う。それを聞いていた *Mary Crawford* が、*Sotherton Court* がどんな屋敷かについて質問すると、*Edmund* が “The house was built in Elizabeth’s time, and is a large, regular, brick building — heavy, but respectable looking, and has many good rooms.” (41) と答える。この時点で *Mr. Rushworth* の屋敷がエリザベス朝から

続く伝統あるものであることが判明する。Mr. Rushworth は、自分の地所をどうしても改良したくて、Everingham にある自分の領地を改良したことのある Henry Crawford に一度 Sotherton Court を見に来てくれるように依頼する。

Sotherton Court の壮大さは、屋敷に着く前からでも窺い知ることができる。領地内の村に、立派な尖塔がついた教会があり、牧師館、救貧院があり、園丁小屋の門を抜けて屋敷につくまでにさらに1マイル近くかかる庭園を有する広大な敷地の中に「自由保有権を有する立派な大邸宅」(the capital freehold mansion)、つまり「荘園内の刑事民事に関するあらゆる裁判権が認められている昔ながらの荘園領主屋敷」(the ancient manorial residence of the family, with all its rights of Court-Leet and Court-Baron 59) がある。さらに屋敷に入れば、Mr. Rushworth の母 Mrs. Rushworth による案内が始まる。屋敷内の数々の部屋の天井は高く、間取りも広く、50年前に好まれた趣向の家具がたくさんあり、磨かれた床、頑丈なマホガニー材の家具、豪華な織物、大理石、金箔張りや彫刻など見事なものばかりがある。

Mrs. Rushworth's guidance were shewn through a number of rooms, all lofty, and many large, and amply furnished in the taste of fifty years back, with shining floors, solid mahogany, rich damask, marble, gilding and carving, each handsome in its way. (60)

以上から見ても Rushworth 家がいかに隆盛を極めてきたかがわかる。その次に案内されたのが一族の礼拝堂である。この礼拝堂は James 2 世 (1633-1701) の時代に作られたもので、以前は、朝夕絶えず礼拝に使われていたが、先代の当主が廃止してしまったことを Mrs. Rushworth は以下のように説明する。

"This chapel was fitted up as you see it, in James the Second's time. . . . It is a handsome chapel, and was formerly in constant use both morning and evening. Prayers were always read in it by domestic chaplain, within the memory of many. But the late Mr. Rushworth left it off." (62)

ここで James 2 世の時代から守られ、定期的に行われてきた朝夕の礼拝という習慣が Mr. Rushworth の父によりついでてしまっているのがわかる。そしてその息子も屋敷を改良したいと望んでいる。親子二代で伝統あるものを破壊しつつあると言っているだろうか。

古いものから新しいものへと変化めまぐるしい世の中であって、Mr. Rushworth は、その動きにある種敏

感である。そのことが決して悪いわけではない。しかし、これから後も家を存続させていくために、彼のように自分ではよく考えないで流れのままに変化させていくことが果たして適切なことなのだろうか。確かに脈々と受け継がれてきた大地主階級の権力は強いが、いつの世もその時の当主次第で、時代の波にうまくついてゆけず、衰退をたどる場合もある。ここに継承性による弊害が出る。Rushworth 家のように代々土地や財産を継承していく場合、当主は放っておいても確実に財産が入るという将来を保証された環境で育つ。いつまでも同じ環境であれば問題ないが、そうはいかないのが常である。安穏な環境下で育った当主は、時代の波が押し寄せてきた時、水谷三広が言うように「改良に必要な思い切った企業家精神や着実な実業家能力」(209) に乏しくなりがちである。例えば、*Persuasion* (1818) の Kellynch-hall の当主、Sir Walter Eliot は、自らの浪費によって館を出ていかざるを得なくなってしまった事態に目を背け、周囲の儉約の勧めにも理解を示さず、『准男爵名鑑』を読んで過去の栄華にすぎただけで何もしない。*Mansfield Park* では、Rushworth 家は最終的には深刻な危機には陥らないが、自分の地所の改良を自分で考えることをしないで他人に簡単に委ねてしまおうとするその行動は危険である。

3 Mansfield Park

続いて *Mansfield Park* の Bertram 家について考えていきたい。Austen はいつも主たる屋敷については、当主の仕事や収入など詳細に書くのだが、*Mansfield Park* の当主 Sir Thomas Bertram については、その描写が少ない。次の文は数少ない彼についての描写である。第1巻第1章冒頭で以下のように述べられている。

About thirty years ago, Miss Maria Ward of Huntington, with only seven thousand pounds, had the good luck to captivate Sir Thomas Bertram, of Mansfield Park, in the county of Northampton, and to be thereby raised to the rank of a baronet's lady, with all comforts and consequences of an handsome house and large income. (5)

ここから彼がノーサンプトン州に *Mansfield Park* という屋敷を所有する准男爵であることがわかる。この描写からいかに彼が裕福な環境にあるかが窺える。そして、後になって Mary Crawford が Bertram 家の長男

Tom の身分が結婚相手として申し分ないと考え、更にパークは、周囲が5マイルもある大パークで、館は広々として当世風な建て方であり、その周りの樹木の茂り方やイギリス中の紳士の大邸宅を彫刻図版に彫って収集するならば、必ずその中に加えられるだろう屋敷であると以下のように観察していることから、Mansfield Park の屋敷の様子を見て取ることができる。

Miss Crawford soon felt, that he (=Tom) and his situation might do. She looked about her with due consideration, and found almost every thing in his favour, a park, a real park five miles round, a spacious modern-built house, so well placed and well screened as to deserve to be in any collection of engravings of gentleman's seats in the kingdom, and waiting only to be completely new furnished . . . (35)

Bertram 家は准男爵という家柄であるが、Rushworth 家とは根本的な違いがある。それはそれぞれの家を支えている経済的基盤である。Rushworth 家がエリザベス朝から続いている家系で所有する土地から得る収入を得ているのに対し、Bertram 家の収入源はイギリス国内にはない。Bertram 家が何を経済の基盤としているかを窺い知ることができるのは、第1巻第3章で「西インド諸島の所領で多少の損失があった」(19)という言葉と Lady Bertram が口にした「Antigua」(23)という言葉である。この後 Sir Thomas は財政再建に向けて早々に Antigua へ出発する。Antigua には砂糖農園があるのだが、そこへ急遽当主自らが赴くことになるほど砂糖農園の財政状態は芳しくなく、同時に Bertram 家の経済基盤が大きく Antigua にかかっていることがわかる。つまり Bertram 家が基盤としているのは国外にある砂糖農園であり、Sir Thomas は Antigua の不在地主ということになる。当時は彼のような不在地主は多かつたらしく、財を成した後、まずその子弟を教育のためにイギリス本国へ帰らせ、そしてその後自らも、プランテーションを代理人に任せて、本国に帰国したものだっただよう(向井 6)。つまり、Bertram 家は当時イギリスの植民地であった西インド諸島に農園を持ち、そこでの経営で富を得てその財力を持ってイギリス本国に帰還した新興階級の一族と考えられる。そのことを Brian Southam は、以下のように述べている。

There is something distinctly "modern-built", nouveau and West Indian about Sir Thomas and his social

standing, a point worth making since some commentators wholly misplace Sir Thomas, writing about him as a member of the old and established landed gentry who bears an ancient title. (497)

この Sir Thomas のようなタイプの不在地主には、問題点がある。それは、不在地主ゆえに農園への管理が行き届かない点と社会情勢に左右されやすい点である。前者は土地の改良不足で収穫が減ったことと砂糖の値が暴落したことに起因する。後者に関しては、社会情勢は時代が動くにつれて刻一刻と変化していくという点である。Sir Thomas は、ナポレオン戦争の影響などで特に世界の情勢が変化しやすい厳しい状態に見舞われたのである。加えて奴隷制廃止運動の高まりでそれまで労働者として雇っていた奴隷たちを使うことができなくなり働き手が減ってしまった(向井 8)。そのため、Sir Thomas は経営状態を立て直すのに2年近く Antigua に滞在しなければならなかったのである。

Rushworth 家とは違った意味で Bertram 家もその基盤が磐石ではない。Rushworth 家には、国内にちゃんとした社会的・財政的基盤があり、培ってきた権力もあるが、Bertram 家にはそれがない。それゆえに Sir Thomas は国内でのしっかりとした基盤を欲したに違いない。その証拠に彼は、Maria が Mr. Rushworth と結婚するという知らせを Antigua で受けた時、その良縁にただ喜び 相手の人柄を確認することなくすぐに許可を出した。

Sir Thomas, however, was truly happy in the prospect of an alliance so unquestionably advantageous, and of which he heard nothing but the perfectly good and agreeable. It was a connection exactly of the right sort; in the same country, and the same interest; and his most hearty concurrence was conveyed as soon as possible. (30)

その後、帰国して実際に将来の花婿 Mr. Rushworth と対面し、彼の愚鈍さに気づき、Maria に愛情がないと感じ取って一旦は娘の結婚に躊躇いを見せ、Maria に結婚の意思を確認するが、彼女の意志は固い。Maria が Henry Crawford へのあてつけで結婚を決めたという彼女の本心を Sir Thomas が知るはずもなく、彼はこの結婚がもたらす自分への社会的利益を思い、改めて喜ぶ。

“(Sir Thomas) . . . happy to secure a marriage which would bring him such an addition of respectability and influence, and very happy to think any thing of

his daughter's disposition that was most favourable for the purpose." (138)

しかし、その喜びもつかの間のことで、Maria と Henry Crawford が駆け落ちしてしまう。Maria は Mr. Rushworth に離婚され、Mansfield Park から追放される。Sir Thomas は、大地主階級との縁故だけでなく娘までをも失う。

4

時代はまさに古いものから新しいものへと移り変わっている。思想、価値観、慣習、職業のあり方など変化しているものは様々である。ここまで Rushworth 家の Sotherton Court と、Bertram 家の Mansfield Park それぞれの社会的・財政的基盤について考察してきた。両者の違いはそれぞれの財の成し方にあった。財産という点から考えると、当時の地主階級の人々は、財産は長子相続が慣例で次男以下は職業に就くことになっていた。そして、これまでの Austen の作品では、話の中心になる家庭は、イギリス国内に代々の土地を持つ地主階級の家庭が中心であった。しかし、18世紀半ばから19世紀にかけて、産業革命が発達したことにより、一代で財産を築いて土地を購入し、地主階級の仲間入りを果たした新興階級の家庭が増加した(ブラウン, 15-53)。そして、Mansfield Park では、国外の植民地に農園を持ち、そこでの経営次第で財政状態が変化していく Bertram 家のような家庭が中心に描かれている。この家庭でも長男が家を継ぎ次男が牧師になるが、一方で、ヒロイン Fanny の兄 William Price が海軍で活躍している様子も窺える。そして Austen の最後の作品 *Persuasion* では、准男爵の地位を持つ Sir Walter Eliot の家は彼自身の浪費癖により

衰退し、彼が毛嫌いしている海軍に在籍する Mr. Wentworth のような特に後ろ盾もなく軍人としての功績だけで財を成したタイプの人物が、クローズアップされている。そういう意味で *Mansfield Park* は、財産や階級のあり方に対する価値観が〈旧〉から〈新〉へと移り変わる途中の様子を描いた作品だとは言えないだろうか。

引証資料

- Austen, Jane. *Mansfield Park*. ed. Claudia L. Johnson, Princeton University, 1998.
- Southam, Brian. "The Silence of the Bertrams: Slavery and the chronology of *Mansfield Park*", *TLS*, Feb. 17, 1995.
- J. P. ブラウン『十九世紀イギリス小説と社会事情』英宝社, 昭和62年。
- 杉恵悳宏「カントリー・ハウスと室内空間」, 久守和子編『〈インテリア〉で読むイギリス小説—室内空間の変容』ミネルヴァ書房, 2003。
- 水谷三広『英国貴族と現代—持続する統治 1640-1880』東京大学出版会, 1987。
- 向井秀忠『小説研究』第10号, 1999。

参考文献

- Austen, Jane. *Persuasion*. ed. John Davie. Oxford University Press, 1980.
- Duckworth, Alistair M. *The Improvement of the Estate: A Study of Jane Austen's Novels*. Baltimore and London: Johns Hopkins UP, 1971.
- Fleishman, Avron. *A Reading of Mansfield Park*. The Johns Hopkins Press, 1970.
- 惣谷美智子『ジェイン・オースティン研究—オースティンと言葉の共謀者達』旺史社, 1993。
- 都留信夫『イギリス近代小説の誕生—十八世紀とジェイン・オースティン』ミネルヴァ書房, 1995。
- 松村昌家『十九世紀ロンドン生活の光と影』世界思想社, 2003。